

# 万葉集卷十三の巻頭歌

——汗瑞之振の意義——

垣 見 修 司

はじめに

冬こもり 春さり来れば 朝には 白露置き 夕には 霞たな  
びく 汗瑞能振 木末が下に うぐひす鳴くも (⑬三三二一)

右の一首

万葉集卷十三の巻頭に春の情景を詠む長歌がある。朝の白露と夕方の霞が対句に配され、木伝いに鳴くうぐいすを描くことで春の到来を歌う。わずか九句で反歌も付さない小長歌であるが、結句につながる句に難訓「汗瑞能振」が残されている。旧訓に「あめのふる」と訓まれており、最近は「かぜのふく」の訓が採られるようになったっているもの、なお無訓のままとする立場もある。定訓が得られないのとはより集中あまり例がない用字のためであり、文字の訓詁を確認することでこの難訓部分を検討したい。

一 諸説整理

まず難訓部分の三字目は元・天・広・西・紀・温・陽・矢・近・京が「瑞」、細・宮・無・附・寛が「湍」の字に作るが、類のみ「埼」とする。「汗」「能」「振」に古写本、版本段階での異同はない。訓は西・紀・温・陽・矢・近・京の仙覚系諸本が「汗瑞能振」の本文に「あめのふる」と付訓し、「汗湍能振」の本文を採る細・宮が「あせのふる」とする。ただし同じく「湍」の原文を持つ附・寛は「あめのふる」で、原文を唯一「埼」とする類も「あめのふる」と訓じる。なお長歌ということもあり非仙覚系の元・天・広には訓がない。大多数の古写本は「あめのふる」と訓じている。

ところが近世の注釈において異なる訓が提示される。代匠記は版本に「汗湍能振」を「あめのふる」と訓じていることについて、

汗湍能振、これをはかせのふくと讀へし。汗は音を取、湍は和訓を取、振は日本紀にも、ふるふをふくといへり。風のふくも、物にふれてふるふ心なれば、和語かよへり。

と述べ、汗は音假名「か」「湍」は瀬と同義であることから訓假名として「かせのふくは春風の、とかにふくなり」と理解するのである。この訓については、入門後まもない宣長と真淵との問答を記した万葉集問目に、

汗湍能振、コハ、イカニ訓侍ン、カゼノフクト訓メルモ、佳モ覺工侍ラヌハ、イカニ、誤字ナト侍ルニヤ、

はやくより、さまざまに考しかど、いまだ定かならず、先に汗池那挽ウチナヒなどかと思ひしも、上句と句調わろし、但、上句は、こ、句也、されと、たゞの言をいひてハわろし、汗——ハ、地名なるへし、猶、考給へ

との問答が載せられており、両者とも適当な訓を考えめぐねていた事情が知られる。やがて真淵は考に原文を「汗微竝能」と改め、

今本に汗湍能振と有は、草の手より誤れりと見ゆ、此言、ところの名ならでは一首のこ、ろ穩かならず、景のみよめる長哥に地をあげいはぬは凡なきものなり、

と述べている。一方宣長は万葉問聞抄に田中道麻呂への答えとして「いかさま地名と聞ゆ、カミナミも一説に備ふへし、また御諸能夜

にてもあるへし」と述べており、真淵同様地名に解する方法を模索している。両者の説は略解や古義にも引かれるが、いずれも誤字を前提とする訓であり、広く認められるには至っていない。

むしろ契沖が示した「かせのふく」の訓は原文「汗湍能振」ともに、全釈、総釈、窪田評釈、全註釈、佐佐木評釈、私注等昭和以降の注釈および新校に採られることになる。これは全註釈が「この歌の上下の句の内容から見て、雨の降るでは矛盾があるから、風の吹くによるべきである。春風のそよそよ吹く意味に、コヌレを修飾している。」と記すように「雨の降る」と「木末が下に」の続きに矛盾を来すという理解にもとづくであろう。雨の降るが木末のみにかかるのなら問題は無いが、木の下に雨が降ると考えるとたしかに不自然で、木末が下に吹く風の方が理解しやすい。「汗湍能振」を「風の吹く」と訓む立場はその後大系や全訳注が踏襲する。

しかし基本的に細・宮によって原文に「湍」を採用するのは無理がある。非仙覚系諸本では類が「埼」という単独本文を持つものも元と天、広は「瑞」であるため本来は「湍」ではなく「瑞」であった可能性が高い。

また小島憲之氏は、集中「汗遇比須」が「汗遇比須」と誤写される例を挙げて「汗」の字が筆ぐせとして「汗」に誤られやすいことを指摘する。そしてこの句についても鶯の動作を表す「ウチハブキ

(ハブリ)の訓を念頭に「汗知羽振」という原文を考える。澤瀉注釈も「汗」を正しいとする小鳥説を踏まえ「汗陳(珍)羽振」を提案する。いずれも「風の吹く」に対する違和感から案出された異見と言えるが、「汗」はともかくとしても「瑞能」二字まで誤りとする点は真淵や宣長、雅澄と同様、誤字説の悪循環に陥っていると見られなくもない。

このような混乱のために全集、稿本、おうふう本、集成、新編全集、新大系、岩波文庫新版は冒頭に掲出したように無訓で原文「汗瑞能振」を載せ、慎重な態度を保つ。ただ近年の注釈書で付訓するのは小鳥氏、澤瀉注釈の見解を支持する和歌大系を除けば、釈注、全注、全解、全歌講義いずれも原文「汗瑞能振」のまま「風の吹く」と訓じている。その点が「汗瑞能振」を「風の吹く」と訓んでいた全訳注までの諸注からの変化である。これには鈴木武晴氏「汗瑞能振の訓」<sup>⑤</sup>が関わる。鈴木氏は「かぜのふく」の訓が「汗瑞能振」のまま可能であることを論じる。まず「汗<sup>カ</sup>」と同様に韻母が省略される略音仮名の例を挙げ、実際に豊後国風土記に「汗」をカの音仮名に用いる「名を小竹鹿奥(志努汗意積と謂ふ。)(大野郡)の例があることから「汗」を「カ」と訓むことを認める。さらに説文解字の「瑞」に「是偽切」の反切が確認でき、「是」は集中「かぜ」の仮名表記に用いられること、そして唐代に去声の「瑞」と上

声の「是」とが通じる例があることから「瑞」と「是」とが極めて通じやすかったために、「瑞」も「是」と同じく慣用的に「ぜ」と訓まれたのではないかと述べて「瑞」を「ぜ」の仮名と認めるのである。その後、釈注は集中ほかに例がない「汗<sup>カ</sup>」「瑞<sup>ゼ</sup>」の音仮名が用いられることを不審としながらも鈴木説に従い、全注、全歌講義が「汗瑞能振」を「風の吹く」と訓むようになっていく。<sup>⑥</sup>

しかし、「瑞」と「是」の中国語音がいずれも日本語音の「シ」にあたるので同音と見なせるとしても、「是」が「ぜ」の仮名に宛てられるから「瑞」も「ぜ」の仮名に用いられたとするのは早計であろう。なぜ「是」が「シ」ではなく「ぜ」と訓まれるのかわからないし、また「瑞」が「シ」「ぜ」いずれに訓まれる例も上代には見られないからである。観智院本類聚名義抄にはそれぞれ、

是 コレ 和せ:

瑞 音睡 マコト アラハル(ス・ニ) オホセノフ ヨシ  
シルス カナフ イカキ ツハヒラカ 和スイ

とあり「是」には「ぜ」、「瑞」には「スイ」の和音が記される。瑞と是を同音と見なすには問題が多い。それゆえ釈注は「瑞」をゼの音仮名と見ることに「いささか不安が残る。」と述べ、全注も「なお問題は残るかも知れないが、この説によることにしたい。」と菌切れが悪い。訓を付さない慎重な判断も妥当と言えそうである。

## 二 「瑞」の字義と和語「みづ」の語義

「瑞」を「是」と同様の「ゼ」の音仮名と認めることはできないし、先述したように「湍」の本文に従うこともできない。原文は「汗瑞能振」で良いが、「汗瑞」を仮名で訓めないとするは訓字の可能性を考える必要がある。次にそれぞれの字義を検討する。「瑞」の集中例は少ない。

…古ゆ 無利之瑞 度まねく 申したまひぬ…(19)四二五(四)

日本根子高瑞日清足 姫天皇なり(20)四四三七(題詞)

四二五四歌はこれまでに例の無いような祥瑞が報告されていると歌っており、瑞兆の意に用いられている。「瑞」は説文解字に

瑞 以玉為信也。从玉。尚聲也。

とある。天子が諸侯を封じる時に玉製の器(圭玉)を与えて信認する「しるし」の意を表す。大広益会玉篇にも「瑞 市愾反 信節 諸侯之珪」とある。また、祥瑞の意としては一切経音義に

瑞相 時偽反。周禮、典瑞掌三玉瑞。鄭玄云、瑞、符信也。案典瑞者、若今之符寶印也。蒼頡云、瑞、應也。顧野王云、王者盛德感乎乾坤、故天地應之以信瑞也。德感乎山川丘陵、則芝草植也。制禮作樂、則祥風至。皆是祥瑞也。説文云、瑞、信玉也。從玉而省聲也。(玄應音義・卷六)

とある。典瑞は玉器を司る官名で、周礼・典瑞には「典瑞。中士二人。府二人。史二人。胥一人。徒十人(瑞、節信也。典瑞若今符璽郎)」とあり、鄭玄注はいま天子の印璽を司る符璽郎のこととする。一節に顧野王の名が記されるから原本系玉篇の佚文と認められ、そこには王の徳が盛んであれば天地をうごかし、天地はそれに信瑞をもって応えると説かれ、具体的には山川丘陵に影響を与えて芝草が生育することや、礼制を定め音楽を作ることなどでたい風が吹いてくることが祥瑞として挙げられる。つまり四二五四歌に天地によって示される「しるし」を歌うことは天皇の徳を称える意図がある。

元正天皇の和風諡号に「瑞」が用いられるのも天皇の盛徳を意図するのであろう。この「瑞」は「豊葦原千五百秋瑞穂の地有り。」(神代紀一書第一)の訓注「瑞、此には弥図と云ふ。」によって「みづ」と訓まれ、むしろこちらの訓がよく用いられる。反正天皇が「水鹵別命」(反正記)とも「瑞鹵别天皇」(反正前紀)とも記されることから「瑞」が「みづ」と訓まれることは確かで、「瑞宮」(神代上第八段一書第五)や崇神天皇の「瑞籬宮」(崇神紀三年九月)がそれぞれ「みづのみや」「みづがきのみや」と訓まれる。「みづ」はみずみずしい意の形容詞と考えられ、多くは植物部位と複合した形で現れる。

水穂(2)一六七、一九九、(9)一八〇四、(13)三二二七、三二五

三)

水枝 (⑥九〇七、⑬三三三三)

水茎 (⑥九六八、⑦一一三一、⑩二一九三、二二〇八、⑫三〇〇)

六八)

ただし万葉集には瑞穂や瑞枝のように「瑞」の字を用いた例はなく、訓字で植物部位に続く場合には「水」が用いられる。水は植物に不可欠であり、茎から枝、そして葉や穂に至るまで水が行きわたることが植物の生命を保証する。まさにみずみずしいことが生命力に満ちていることの証であるから「水」は素直な用字と言える。「水茎」は「水茎」の形で枕詞をなし類音の「水城」を導く例以外は「岡」にかかる。係り方は未詳とされるが、神功前紀に見える「水葉稚之出居神」が「水葉の稚やかに出で居る神」と訓めるとすれば「水茎」も「わか」の類音で「をか」にかかると考えられる。私記(丙本)には「水葉」に「美奈波」の訓があり、国史大系本や大系、新編全集は「みなは」と訓む<sup>⑩</sup>。しかし釈紀は「水葉稚」について、

私記曰。師説。水中葉。甚翠稚也。言此神如此葉盛出居也。

と説いており、「水葉」を「わか」にかかる枕詞のように捉え、それをそのまま神の勢いの盛んな様子に譬えている。「みなは」の訓は直前にある「水底」の訓「みなそこ」に合わせたと考えられるが、

水の底だから「みなそこ」と訓むのであって、水葉という表現がただちに水草や海藻を指すとは考えにくく、この例もみずみずしい葉の意の「みづは」と捉えるのが良いと思う。

「美豆山・弥豆山」(①五二)も植物が生い茂り、生命力にあふれた山を表すのであろう。反正天皇は記に「御菌の長さ一寸、広さ二分、上下等しく斉ひて、既に珠に貫けるが如し。」と記される。紀も「生れましながら、菌一骨の如くにして、容姿美麗なり。」とし、立派に生えた菌が名前の由来である。生まれた時から生え揃っているような勢いのある靈妙な菌を「瑞菌」と言うのである。瑞菌別の菌は直接的に水と関わるわけではないのに瑞菌とされるのは、「みづ」の語がすでにくすしきものをも意味したためと考えられる。それはおそらく「水」のもたらす不可思議な力を由来とする。ただし植物部位に「みづ」が冠せられることもたんにみずみずしいことを表すだけでなく、水によってもたらされる旺盛な生命力を靈威として位置づけているのであろう。植物が少し見ないうちにすつかり成長したり、気孔からの蒸散によって葉先に水滴を付けたりするうな、万葉びとにとって不可解な様子を靈威と観じて「みづ」を冠するのである。生育の早さや力強さは若さを思わせるゆえに、「わか」およびその類音「をか」を導くことにもなる。反正紀は続いて太子瑞菌別が水浴する「瑞井」に多遅の花が落ちたことから多遅比

瑞鹵別天皇と称されたとも記しており、瑞なる力と縁が深い。

みずみずしさや若々しく力強い勢い、そしてそれらから感受する靈威をも意味する「みづ」の語は、先述の「瑞宮」や「瑞籬宮」のように神や天皇に関わる建造物を讃める美称としても用いられる。<sup>⑩</sup>

娘子らが袖布留山の水垣之久しき時ゆ思ひき我は(④五〇一)

娘子らを袖布留山の水垣之久しき時ゆ思ひけり我は(⑪二四一)

五)

楯垣久しき時ゆ恋すれば我が帯緩ふ朝夕ごとに(⑬三二六二)

「瑞垣」は神社の周囲に廻らされた玉垣のことで、古来から長く続いていることから「瑞垣の」は「久し」を導く枕詞と説かれる。このうち卷十三の用字「楯垣」は異例といえる。楯は、

楯 如□反 石榴也 榛属也(篆隸万象名義)<sup>⑫</sup>

楯 如灼切 木名 楯榴也(大広益会玉篇)

のように中国では石榴すなわち果樹のどくろを意味する一方で、

楯 而灼反、楯桶標、之毛止(新撰字鏡)

楯 音若 石榴也 安石榴也 シモト スハへ(観智院本類聚

名義抄)

とあり、シモト、スハへ(エ)の国訓を持つ。シモトは貧窮問答歌に「楚取シモト里長が声は(⑤八九二)と歌われ、観智院本類聚名義抄では他に「棒」や「蕃」「筈」に付されるようにむち打つための

杖として使用する、しなるほど細い木のことを言う。スハへは「楚」の訓にもあり、罰するための杖を意味する「荆」にもスハエの訓がある。スハへは飾らないそのままを意味する接頭語「す」に延ばす意の「延ふ」(下二)の複合形か。つまり切った根や株からまっすぐに伸長させた木工用木材をスハへと言い、刈り取った棒状の木をシモトと言うのであろう。

「楯垣」は正倉院文書の東大寺桑原庄に関する越前国田使解の、

修理楯垣一條 長百五十丈(天平勝宝八歳二月一日)

楯垣一條 長一百五十丈(天平勝宝九歳二月一日、天平宝字元年十一月十二日)

は、東大寺莊園の建物の周囲に廻らせた垣のことと見られる。<sup>⑬</sup>先掲の「蕃」(名義抄)には「シモトカキ」の訓があるから、楯垣もひとまずは細い木で作るシモトカキと呼ばれていた可能性がある。天平宝字六年四月一日の文書には、木工所の作物の一つに、

採楯二百卅八束 功卅八人

採柴一百五十荷 功卅人

と一人一束で楯を採集する仕事が一五五荷で柴を採る仕事に並んで記される。また木簡にも、次の例が確認できる。<sup>⑭</sup>

①・□(長カ)五丈○楯十□長二丈五尺各二持○楯廿荷・□四丈楯卅(へ)○□□□楯五十荷○□□(葛取カ)卅丁○桁作廿丁

(平城京左京三条二坊一・二・七・八坪長屋王邸)

②・佐紀瓦司進上○楮十一荷○／数二百枝〳〵右付栗○◇・直少  
万呂申送以解○天平八年十二月八日史生出雲廣↓◇(平城京左  
京二条二坊五坪二条大路濠状遺構(北))

③・上楮事○合楮式拾荷〳〵◇◇〳〵□〔付カ〕神人荒尾○□  
□□〔神龜六カ〕年三月十七日大生〳〵(平城京左京二条二  
坊十・十二坪二条条間路北側溝)

④・瓦屋司○進送□〔荒カ〕切黒木四荷○／負各十一□〳〵楮三  
荷○／□〔負カ〕〳〵〳〵右・□□〔如前カ〕以解○□□□□  
〔天平八カ〕〳〵(平城京左京二条二坊五坪二条大路濠状遺構  
(北))

⑤・請□〔利カ〕木一枝○楮一束○上件等物□□□□□□也□〔恵  
カ〕之・○〳〵(平城宮宮城東南隅地区・二条大路)

長さが丈や尺、束の数が荷の単位で記され三荷から五十荷までさま  
ざまな数量がある。②の楮十一荷、二百枝は、十一荷の総本数が二  
百枝であろうか。④の□□〔荒カ〕切黒木四荷や⑤の□□〔利  
カ〕木一枝と比べても、楮はかなりの数量があるので一本はそれ  
ほど大きくないであろう。①の長二丈五尺も長さの合計と思われる。  
②や④は造瓦所などに進上されたと見られる。さらに

⑥□遣採楮但馬国六十二番夫卅一人□〔料カ〕(長岡京跡左京三

条二坊八・九町)

⑦楮取遣雇人□□米四升○／受即／十二月廿六日稻虫〳〵〳〵(平  
城京左京三条二坊一・二・七・八坪長屋王邸)

の例は楮を採取する人夫の雇用に関する記述であろう。つまり楮は  
垣などの造作を行う際の木材の一種として流通していたのである。

契沖は代匠記(初)に、

柜楮越尔麦食む駒の罵らゆれどなほし恋しく思ひかねつも(⑫  
三〇九六)

の「柜楮」を馬欄まざと訓む例や日本書紀の「弱木」をシモトと訓む例  
(雄略即位前紀)を引きつつ、「萩のことくほそき木のなみたてるな  
り。」とし、瑞垣について

昔はみつかきをも楮にてゆひければ、ませ垣の久しき世よりと  
つ、けたる歎。

と述べている。たしかにシモトじたいは細い木で、「瑞」と表現さ  
れるようなみずみずしさはない。その点は契沖の言うように神社の  
瑞垣も楮で作られた垣であることから「みづかき」の用字に宛てた  
ものと言える。ただし楮が木偏に若をあわせた字であり、スハへの  
ように勢いよく成長する若木(弱木)を意味するため「みづ」に宛  
てたとも考えられる。正倉院文書に確認できる「楮垣」は、木材と  
しての楮を利用しているはずだから、釈注が言う「常緑樹の垣」と

考えるのは難しいが、「みづ」と「みどり」の関わりを考えると、<sup>⑬</sup>崇神天皇の瑞籬宮などもとは常緑樹の垣を言ったものかもしれない。  
ない。

いずれにせよ和語「みづ」はみずみずしく若々しい勢いとそれから感じられる靈威を意味する。万葉集ではそのような「みづ」に「水」の字が多く用いられる点に注意しておきたい。

### 三 「汗」の訓詁

「汗」もまた集中には他に一例しか見られない。

…二並ぶ 筑波の山を 見まく欲り 君来ませりと 暑けくに

汗可伎奈氣<sup>あせかきなけ</sup> 木の根取り うそぶき登り… (⑨一七五三)

筑波山を登ると暑さから汗をかいて嘆くと歌う。説文解字注に

汗 身液也。从<sup>レ</sup>水。干<sup>レ</sup>聲。

とあり、汗は身体から流れ出る水分を意味するから、

汗 音翰 アセナカス 又音寒旱干 (観智院本類聚名義抄)

汗 蔣勣切韻云、汗、音寒、一音翰阿勢、人身上熱汁也 (和名

類聚抄)

との記述を俟つまでもなく「あせ」の正訓字として良い。三三二二一歌の異訓に「あせのふる」(細・宮)があるが、歌われる春の情景には汗をかくと描かれそうもない篤しか現れない。細、宮の訓は

「汗」の訓「あせ」の略音「あ」と「湍」の訓仮名「せ」によって「あせ」と訓んだと見られるが、「あせのふる」では意味を成さないし、そう訓ませるとするなら「湍」はむしろ不要である。

他方、「汗」には次のような訓詁がある。

汗 何旦反 小液也 (篆隸万象名義)

汗 何旦切 小液也、又占寒切、餘汗縣名 (大広益会玉篇)

「小液也」は図書寮本類聚名義抄によれば原本系玉篇に基づく。

汗 東云音翰 玉云小液也 真云熱津液也 東云又音寒旱干

順云和・阿勢 真云カン (図書寮本類聚名義抄)

説文解字注が各本に「人液」とするのを太平御覽本によって「身液」に訂していることから玉篇校釈は「小液」は「人液」の誤りかとするが、右に示したように複数の本に確認できる「小液」で良いだろう。小液は小さな汁つまり水滴のようなもので、「真云」は熱によつて染み出る液と記すので体表を流れるあせと同じことも考えられるが、譬喩としてならばむしろ人体から流れ出る汗に限定されるものではない。「汗」は熟語「浩汗」の形でも現れる。

浩汗 上音皓 广云饒也 水也 玉云流也 東云大也 一、大

流也 盛大也 一 澹 (以沼) 大水貞 水漫貞 一 汗水大也 オ

ホキナリ選 (図書寮本類聚名義抄)

上字「浩」についての訓詁が多いが、浩汗そのものについても「水



大也 オホキナリ選」と記されており、文選には、  
襄陵のほりのほりくわんせき、廣鳥、滲蕩かうかつトテ、汗汗。(木玄虚・海賦)  
に「ヒロクオホイナリ」(和刻本)の訓が確認できる。他にも

潰瀆汗汗、瀆瀆森漫(左太沖・呉都賦)

洪濤瀾汗、萬里無際(木玄虚・海賦)

溟滂渺漭、汗汗涸涸(江賦、郭景純)

南則大川浩汗、雲霞之所沃蕩(王簡棲・頭陀寺碑文)

に用例がある。いずれも海や川の広大な様や波がどこまでも続く様を描く。用例は必ずしも人体から流れるあせに限らないのである。

また「汗」を「汗」とする点についてはたしかに元には「汗」のように見えるはねがあるが、校本万葉集も「汗」の字に異同を認めおらず、「汗」で良いだろう。「汗」は原本系玉篇に残る。

汗 於故反、尚書舊染汗俗咸与惟新、野王案汗猶相染汗也、漢書令染汗有處是也、韓詩曰卒汗菜、汗穢也、野王案、左氏傳由質要治舊滂是也、左傳又曰、川澤納汗、杜預曰、是受汗濁也、

説文一曰小池為汗、一曰塗也、廣雅汗濁也(原本系玉篇)

尚書の「舊染汗俗」(胤征)は旧弊に泥んでいた者を表し、漢書は「捕蠱及夜祠、視鬼染汗令有處」(江充)を引き「染汗」はけがれる意。韓詩は「徹我牆屋」田卒汗菜(詩經・小雅)の注で、田が荒れて水たまりとなること。野王案の左伝は「由質要、

治舊滂」(文公六年)と「川澤納汗、山藪咸疾」(宣公十五年)で、前者は政治における旧来の悪弊、後者は水の汚れを意味する。説文解字には

汗 叢也 从水亏聲 一曰小池為汗。一曰塗也。(説文解字)

と記される。これらによれば広雅疏証の「澳、忍、魄、倭、翰、汗、滂、淖、滉、澳、澁、滉、濁也」の汗は汗の誤りであろう。汗は小さな池や水たまりのように濁った水を意味するため、染や濁に通じるのである。なお新撰字鏡には、

汗 於故反、去、染也、小液也、濁也、塗也(新撰字鏡)

とあるが、「小液也」は玉篇や説文にあるように「小池也」の誤りと見られる。直後に掲出される「汗」の訓詁との錯誤であろう。

つまり三二二歌は霞や鶯の声に春の到来を実感する歌だから、「汗瑞」が訓字とするなら汚れや濁りを意味する「汗」の文字を使うとは考えにくい。「汗」を⑤八三七に見られるウの音仮名と把握するにしても瑞との続きでは適当な語が思い当たらない。逆に「汗」「瑞」ともに水に関わる訓義を持つ。「あめのふる」の旧訓は必ずしも根拠の無い説とは言えないのである。

#### 四 春風と春雨

「かぜのふく」の訓は「汗瑞」がかぜの音仮名と認められないと

すると湍の誤字とするしか可能性はない。その理解が契沖以来踏襲されてきたのは春風が春の景物として想起されやすいからだろう。しかしながら旧訓「あめのふる」の場合も、春雨は景物として歌われる。春風と春雨いずれがこの歌の雰囲気に合っているだろうか。「かぜのふく」を採用する全注は、

春風の音にし出なばありさりて今ならずとも君がまにまに(④七九〇)

青柳の糸の細しさ春風に乱れぬい間に見せむ児もがも(⑩一八五一)

やどにある桜の花は今もかも松風速み地に散るらむ(⑧一四五八)

を引いて、春風は「柳の糸を吹き乱したり花を散らしたり、あるいは音の激しいものにとらえられている。」とする。そして契沖が「かぜのふくは春風の、とかにふくなり」と解するこの歌が異例であることを指摘し、「あるいは「春風駘蕩」と感じるのは誤で、もつと生動感あふれた情景を歌っているのかも知れない。」と述べている。たしかに、春の風は万葉集では激しく吹く風が歌われる。

風交じり雪は降りつつしかすがに霞たなびき春さりにけり(⑩一八三六)

尾の上に降り置ける雪し風のむたここに散るらし春にはあれど

も(⑩一八三八)

は風交じりの雪や風に吹き散らされる雪が歌われる。

…ささげたる 旗のまねきは 冬ごもり 春さり来れば 野ご

とに 付きてある火のへに云ふ「冬ごもり 春野焼く火の」

風のむた なびかふごとく…(②一九九)

風に吹かれる旗を春野を焼く火が風に靡く様に譬えており、軍旗の描写である点を考慮すると風にも勢いがあると見て良い。他に、虫麻呂の童田山詠(⑨一七四七)では桜の花を散らす春風と春雨が歌われる。花を散らす風は静かな風ではあり得まい。鴨君足人の香具山詠(③二五七、二六〇)も池を波立たせる松風はそれなりに強い風のはずである。軍王の山を見て作る歌(①一五)も季節は春で「山越す風」は「ひとり居る 我が衣手に 朝夕に 反らひぬれば」と衣の袖を翻し続ける風として歌われる。以上の例をみるとやはり春の風はそよ風ではないことが知られる。春風に揺れる木々にしがみつく鶯も思い描けないことはないが、問題の句の直前に詠み込まれる朝の白露と夕の霞は強い風とは不似合いな取り合わせと言える<sup>⑩</sup>。春の雨は春の風よりも多く詠まれており、いくつかの類型化も認められる。先掲の虫麻呂歌の風同様、春の雨もまた花を散らす。

あしひきの山の際照らす桜花この春雨に散り行かむかも(⑩一八六四)

春雨はいたくな降りそ桜花いまだ見なくに散らまく惜しも (10)  
一八七〇)

梅の花散らす春雨いたく降る旅にや君が慮りせるらむ (10) 一九  
一八)

詠まれる花は梅も桜もあり、季節的には初春から季春まで幅がある  
が、雨が花びらを散らす発想は共通する。対照的に、春の雨は開花  
や萌芽を促す契機としても歌われる。

春の雨はいやしき降るに梅の花いまだ咲かなくいと若みかも  
(4) 七八六)

春雨を待つとにしあらし我がやどの若木の梅もいまだ含めり  
(4) 七九二)

春雨に争ひかねて我がやどの桜の花は咲きそめにけり (10) 一八  
六九)

山吹の咲きたる野辺のつほすみれこの春の雨に盛りなりけり  
(8) 一四四四)

狭野方は実になりにしを今更に春雨降りて花咲かめやも (10) 一  
九二九)

春雨に萌えし柳か梅の花共に後れぬ常の物かも (17) 三九〇三)  
春の雨が降っているのに咲かないとか咲かないのは春雨を待ってい  
るからとか歌うのは、花が春雨に応じて咲くという発想による。梅、

桜だけでなく、つほすみれ、狭野方の開花と柳の芽吹きもあり、や  
はり時期は三春にわたる。春の雨は開花と落花いずれの契機ともな  
るため次の歌は判断が難しい。

春雨のしくしく降るに高円の山の桜はいかにかあるらむ (8) 一  
四四〇)

盛りを過ぎた桜の花を心配する歌とも、開花を期待する歌ともとれ  
るが、春の雨と花の関係を歌う点は変わらない。

春雨は濡れても良いほどのやわらかな雨としても歌われる。  
衣手の名木の川辺を春雨に我立ち濡ると家思ふらむか (9) 一六  
九六)

家人の使ひにあらし春雨の避くれど我を濡らさく思へば (9) 一  
六九七)

あぶり干す人もあれやも家人の春雨すらを聞使ひにする (9) 一  
六九八)

春の雨にありけるものを立ち隠り妹が家道にこの日暮らしつ  
(10) 一八七七)

我が背子に恋ひてすべなみ春雨の降る別知らず出でて来しかも  
(10) 一九一五)

春雨に衣はいたく通らめや七日し降らば七日来じとや (10) 一九  
一七)

卷九の三首は春の雨に濡れることを詠んだ歌群で、春雨を家郷からの使いと見立てる趣向の中で避けても濡れるとも歌う。春雨は濡れることが歌になるのである。窪田評釈は「目にも留まらない細かい雨のまつわり着くがごとく、避けるけれどいつかわが身をぬらしている」と評している。一九一五歌は春雨が降っているのか判断がつかないほど雨脚が弱かったと見られよう。濡れても寒くない季節ということもあるが、一八七七歌が春雨とわかっているれば恋しい女性のもとまで行ったのに道中で雨宿りしてしまったと後悔するところには、春雨をあまり激しくは降らないものとする認識がある。<sup>20</sup>一九一七歌は春雨で衣がずぶ濡れになるわけでもないのにと歌って来ぬ人をなじっている

もつとも、一六九七歌にも見えるように春雨であつてもできれば濡れたくないという気持ちは歌われている。

今更に君はい行かじ春雨の心を人の知らざらなくに (10)一九一六)

春雨の止まず降る降る我が恋ふる人の目すらを相見せなくに (10)一九三三)

我妹子に恋ひつつ居れば春雨のそれも知ること止まず降りつつ (10)一九三三)

荆波の里に宿借り春雨に隠り障むと妹に告げつや (18)四一三

八)

帰ろうとする人を引き留めたい思いを家の外で降る春雨に託し、あるいは降り続ける春雨を、逢瀬を妨げる障害として歌う。春雨であつても降っていれば外出を控えるのは普通感覚であらうし、秋の時雨と同じように幾日かにわたつて降り続ける長雨としても認識されていたようである。

今行きて聞くものにもが明日香川春雨降りて激つ瀬の音を (10)一八七八)

この歌の場合は明日香川の流れが激しくなると歌っているから、春雨は必ずしも弱い雨に限らないかもしれないが、総じて春の雨はあまり激しくない、濡れても良いほどの雨であつたらう。

### 五 春の雨

「汗」と「瑞」がいずれも水と関わり、万葉集の例をも確認してみると、この歌には春に強く吹く風よりも春のやわらかな雨がふさわしく思われる。雨を汗に譬えた表現はないが、逆に体から出る汗を雨に譬える例は文選にある。

流汗露霖而中遠泥濘 (左太沖・呉都賦)

臨溜之揮汗成雨、曾何足稱 (沈休文・齊故安陸昭王碑文)

呉都賦の例は市場を賑わす人々の汗が雨のようだと言い、安陸昭王

碑文は臨淄の町の賑わいを表す。さらに前者の李善注は「流汗霖霖」に「史記、蘇秦說齊王、舉<sub>レ</sub>袂成帳、揮<sub>レ</sub>汗成雨。毛萇詩伝曰、小雨謂<sub>レ</sub>之霖霖。」と、蘇秦列伝とともに毛詩小雅・信南山の一節を引く。<sup>21)</sup>

上天同<sub>レ</sub>雲、雨<sub>レ</sub>雪雰雰（雰雰雪貌、豊年の冬必有<sub>二</sub>積雪<sub>一</sub>。雨于伝反、崔如字、雰芳云反）益之以<sub>二</sub>霖霖<sub>一</sub>既優、既渥（小雨曰<sub>二</sub>霖霖<sub>一</sub>。箋云、成王之時陰陽和、風雨時、冬有<sub>二</sub>積雪<sub>一</sub>春而益之。以<sub>二</sub>小雨<sub>一</sub>潤澤則饒洽。霖土革反、霖音木、優説文作<sub>レ</sub>優、音憂、渥烏学反）既霑既足、生<sub>二</sub>我百穀<sub>一</sub>。

田地を耕している、天に雲が集まって雪が降り、続いて霖霖が土地を潤して百穀が実ることを歌う。毛伝は「霖霖」を「小雨」と説き、鄭箋は成王の治世は風雨が適い、冬の積雪に加えて春に降る小雨が土地をうるおして豊かになると述べる。霖霖は集中に

…玉梓の 道来る人の 泣く涙 霖霖尔落者…（②二三〇）  
我妹子が赤裳の裾のひづつらむ今日之霖霖尔我さへ濡れな（⑦一〇九〇）

彼方の黄土の小屋に霖霖零床さへ濡れぬ身に添へ我妹（①二六八三）

のように用いられ、「兼名宛云、細雨、一名霖霖小雨也、麦木二音、和名古左女」（和名類聚抄）によって「こさめ」と訓まれる。<sup>22)</sup> つま

り「揮汗成<sub>レ</sub>雨」や「流汗霖霖」という汗を雨に譬える漢籍の表現を学んで逆に「汗」の字によって雨を表したのではないか。春の雨は土地を潤す小雨であり、新たな年の豊作を保証するものであることを万葉びとが詩経や文選の訓詁から学ぶことは難しいことではなかった。このような春の雨についての認識は開花や萌芽を促すという発想と軌を一にするであろう。汗が暑熱によって滲出することと春の温暖な気候によって降り出すこととの類縁性もあざかっていかもしれない。

三三二一歌は「冬こもり春さり来れば」に始めて、白露と霞の対句に鶯を並べて春という季節の到来を歌うことが主題と認められる。<sup>23)</sup> 「汗瑞」はいずれも水に関わる文字であり、春の小雨を汗に譬え、「瑞」には豊年の予兆の意を込めたと見るのが良いだろう。全註釈が「雨の降る木末が下に」を矛盾と指摘する点は、雨が降る梢の、その下に鶯が鳴くと捉えておきたい。

おわりに

「風の吹く」を採用しても本当にその訓で良いか不安をほめめかす注釈書は少なくない。全注は春の風の歌としては異例と指摘するし、釈注も「風の吹く」の語注に「瑞」を本来の形と認める。但し、この句はどこか表現が新しすぎる感を免れない。」と述べる。

なかでも私注は「歌の感銘はアメノフルの方が、反つて勝るやうに思はれるが、しばらく此の訓によつた。」としており、歌の表現として「雨の降る」がすぐれているとする。歌人らしい卓見と言える。卷十三の巻頭を飾る歌として春の訪れを描くだけでなく、豊かな禊りの予祝となるように期待を込めた表現が「汗瑞能振」だったものと思う。

## 注

- ① 精撰本では「汗ハ音ヲ用、湍ハ和名云。湍ハ唐韻云。他端ノ反、一音專、(和名世、)急瀬也トアレハ、汗ト一具ニ專ノ音ヲ用トモ云ヘシ。又和訓ノ世ヲ取トモ云ヘシ。」と述べ、湍の一音專を用いた音仮名の可能性にも言及しており、大系は音仮名として注を施す。
- ② 「万葉集歌の訓詁をめぐって」(『国文学解釈と観賞』二四五号、學燈社、昭和三年一〇月)。
- ③ 『日本語と日本文学』第六号(筑波大学国語国文学会、昭和六年一月)。
- ④ 段注に「唐韻是偽切」とある。
- ⑤ 「可是」(⑤七九九等)、「加是」(⑤三二六等)。
- ⑥ 全解は原文を載せないが、代匠記に従うとしている。
- ⑦ 玉篇佚文補正にも採録される。
- ⑧ 続紀の表記は「日本根子高瑞淨足姬天皇」(元正即位前紀)。
- ⑨ 「若々しく生き生きとしたさま。みずみずしいさま。事物の新しく清らかなさまや、目新しくめでたいさまを讃めている。」(時代別国語大辞典上代編)。
- ⑩ 飯田季治『日本書紀新譚』には「みづは」と訓じている。
- ⑪ 祝詞にも「美頭乃御舍仕奉豆」(六月晦大祓)の例がある。
- ⑫ 『篆隸万象名義校釈』は掲出字を「楷」に誤り、反切下字の原字を詠とし「如椒反」と訂するが、影印によればもとの字は火偏と見られ、旁は判読できない。大広益雲玉篇にある「灼」の誤写か。
- ⑬ 「すはえ」であれば「生ゆ」(ヤ行下二段自動詞)と考えられるが、「すはへ」の訓が多い。また「生ゆ」の複合語「ひこばえ」は新撰字鏡に「比古波江」があるので、観智院本類聚名義抄には「ひこはゆ」で現れる。新撰字鏡享和本の「機」にある「須波紅」は「須波江」の誤りとされ「すはえ」の例となる。
- ⑭ 金田章裕氏「荘所と関連施設の表現」(『古地図からみた古代日本』吉川弘文館、二〇一七年五月)九九頁。
- ⑮ 木簡庫 奈良文化財研究所 (<https://nokin.kanbanbunko.go.jp/ja/>)。
- ⑯ 川端善明氏『活用の研究Ⅱ』(清文堂出版、一九九七年四月)三九頁。
- ⑰ 王念孫『広雅疏証』中華書局、一九八三年五月。
- ⑱ 「汗 胡安反、平、又去、可汗汗也、胡稱也、熱汗也。」
- ⑲ 「我がやどの いささ群竹 吹く風の 音のかそげき この夕かも」(⑩四二九一)も春の歌であるが、風の強さはいずれとも決めがたい。
- ⑳ 「…紅の 赤裳の裾の 春雨に にはひびづちて 通ふるむ…」(⑰三九六九)も春雨に濡れる様子か。
- ㉑ 「藤」は全釈漢文大系『文選』や新釈漢文大系『詩経』では「藤」に作るが、「蘼 蘼葆、亦作蘼」(廣韻)とあり、通用する。
- ㉒ 澤瀉注釈の②二三〇に「蘼葆」の異同を含む考察がある。
- ㉓ 新谷秀夫氏「萬葉集卷十三冒頭歌の性格」(『日本文芸研究』四一卷二号、関西学院大学日本文学会、一九八九年七月)。